

令和七年度 優秀作品集

第三十回少年主張大会

第二十九回鮫川村詩のコンクール

こころのうた



鮫川村青少年健全育成推進協議会

令和七年度「こころのうた」の発刊に寄せて

鮫川村青少年健全育成推進協議会長

鮫川村教育委員会教育長 藤田 充

「こころのうた」は、平成十五年頃、鮫川村の小・中学生や高校生が書き上げた意見文、詩や俳句などを集めたのが始まりです。それから二十年以上にわたって、村の多くの方々に読み続けられ、子どもたちの豊かな心と豊かな感性に共感していただくという大切な役割を果たしてきました。今年度も、「第二十九回こども詩のコンクール」や村の「第三十回少年主張大会」で発表された作品が収録されております。

現代社会は、情報化やグローバル化が急速に進み、価値観が多様化する一方で、予測困難な課題にも直面しています。正解が一つではない時代を生き抜く子どもたちにとって、自ら考え、判断し、行動する力は不可欠です。

今年度の作品においても、子どもたちは、こうした社会情勢も背景に感じながら、日々の生活や地域社会との関わりの中で感じた思いを、自らの言葉で丁寧に表現してくれました。

文章を書くことは、子どもたちの成長において極めて大切な行為です。自分の心の中にある漠然とした思いや考えにしつかりと向き合い、それを論理的な言葉に置き換えて構成する作業は、自己の内面を見つめ、思考を深める絶好の機会となります。また、他者に「伝わる」ように工夫することで、

相手の立場を思いやる力も育まれます。

この作文集には、子どもたち一人ひとりが持つ個性や、物事を深く考える真摯な姿勢、そして何よりも「自分の思いを伝えたい」という強い意志が込められており、保護者の皆様はもとより、地域の皆様にも広くお読みいただきたいと願っております。

子どもたちのみずみずしい感性で描かれた学校生活の様子や、地域の方々との触れ合いの記録は、私たち大人が気づかされ見過ごしがちな日常の豊かさや、地域の魅力の再発見に繋がるものと信じております。

特に、子どもたちが作文の中で示す「ふるさとの未来をより良くしたい」という願いや具体的な提案は、未来の地域社会を共に築いていく上での貴重な示唆を与えてくれることでしょう。彼らの視点から見た地域の姿こそ、持続可能なふるさとをデザインするための原動力となります。

結びに、この作文集の完成にご尽力いただいた全ての皆様に感謝申し上げますとともに、子どもたちがこれから健やかに成長し、文章を書くことを通して培われた「考える力」や「思いを伝える力」を人生の糧として、複雑な現代社会の未来、そして愛するふるさと「さめがわ」の未来を、自らの言葉でたくましく切り拓いていくことを心より願っております。

是非とも、「子どもたちの心の声」を聞いていただきたくお願い申し上げます、発刊に寄せるあいさつといたします。



■第三十回少年主張大会

□未来につないでいきたい米づくり

鮫川小学校五年

本郷 想人・・・1

□小学生最後の一年だから

鮫川小学校六年

関根 優奈・・・2

□見えないところで光る優しさ

鮫川中学校一年

澤村 宗一郎・・・3

□A-Iイラストの活用

鮫川中学校二年

関根 そら・・・4

□私たちの村を未来に残す

鮫川中学校三年

高野 詩織・・・6



■第二十九回 鮫川村詩のコンクール

小学校児童作品

□最優秀賞

「生きる」

鮫川小学校六年

小林

楓・・・8

□優秀賞

「散歩」

鮫川小学校五年

金澤心

晴・・・8

「夏のいつもの日」

鮫川小学校六年

円谷真桜

・・・9

□佳作

「せんぶうき」

鮫川小学校一年

霜田実梨

・・・9

「せんこうはなび」

鮫川小学校一年

赤坂

嶺・・・10

「おそろしいみおちゃん」

鮫川小学校二年

芳賀羽心

・・・10

「入どう雲」

鮫川小学校二年

芳賀

凜・・・10

「太陽さん」

鮫川小学校三年

赤坂嘉信・・・10

「水の始まり」

鮫川小学校三年

澤村信次郎・・・11

「笑顔の花」

鮫川小学校四年

森田陽真璃・・・11

「夏の音」

鮫川小学校四年

須藤望奈・・・11

「葉のへん化」

鮫川小学校四年

西野愛唯・・・12

「夕立」

鮫川小学校五年

大森一葉・・・12

「ぼくのかいねこシマ」

鮫川小学校五年

関根真来・・・13

「夕立ち」

鮫川小学校六年

関根優奈・・・13

中学校生徒作品

□最優秀賞

「空」

鮫川中学校三年

木村梨乃・・・14

□優秀賞

「白でありたい」

鮫川中学校一年

森田優渚・・・14

「夕日がしずんだよ」

鮫川中学校二年

蛭田希ノ風・・・15

□佳作

「前へ進む夏」

鮫川中学校一年

澤村宗一郎・・・15

「星達のささやき」

鮫川中学校一年

鈴木颯太・・・16

「扇風機」

鮫川中学校二年

中川西陽悠・・・16

「花たち」

鮫川中学校三年

芳賀幸歩・・・17

「花火」

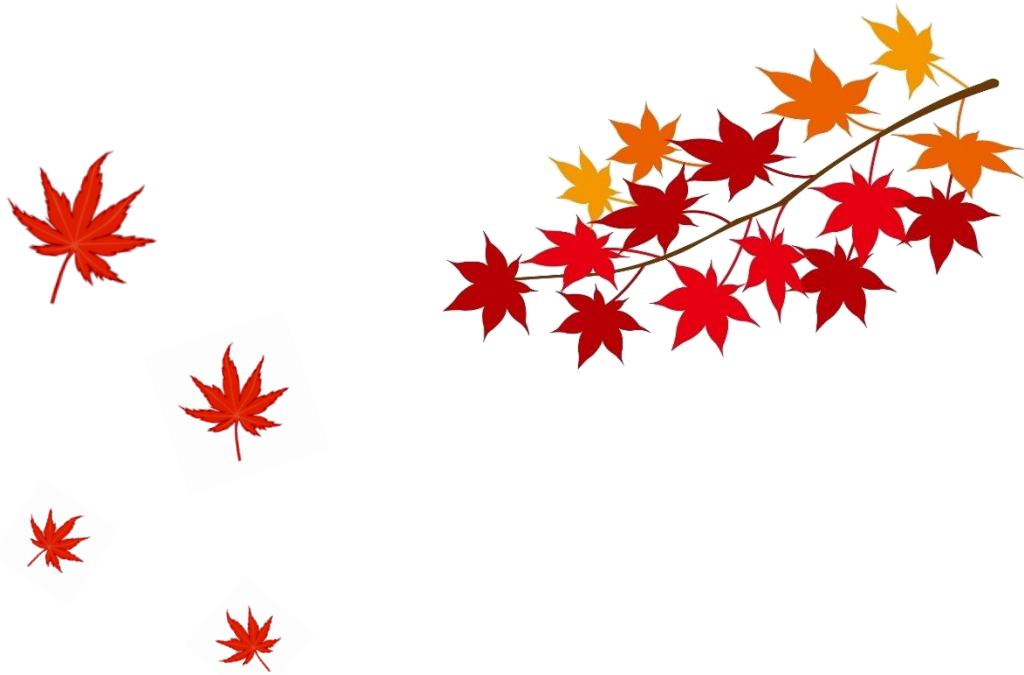
鮫川中学校三年

黒田采花・・・17

「追いかけて」

鮫川中学校三年

須藤菜々美・・・18



第三十回少年主張大会作品

未来につないでいきたい米づくり

鮫川小学校 五年 本郷 想人

ぼくの家では毎年、お米をしゅうかくして食べています。しかし、世の中でお米が不足していることをみなさんは知っていますか。ぼくは、いつも食べているお米が、なぜ不足しているのか気になり、調べることになりました。調べていくと、い常気象による大雨やもう暑、日照不足などのえいきょう、農家の高れい化による田んぼの減少、パンやめんなどのふきゅうによる食生活の変化などが原因で、お米の生産量が少なくなったり、値段が高くなったりしていることが分かりました。こうして、お米について調べていくうちに、ぼくは米づくりについて関心をもちました。そこで、実際にお米をつくっている、ぼくのおじいちゃんにくわしく話を聞くことにしました。おじいちゃんに話を聞くことで、お米を収かくするまでに、たくさん手間がかかっていることが分かりました。まず、春になるとなえづくりのための種まきをします。そして、田んぼに肥料を入れたり、代かきをしたりして、田植えに向けて準備をしています。ぼくの家では、機械を使ってなえを植えています。ぼくは、五年生の総合的な学習の時間で行っているもち米づくりでは、手作業でなえを植えました。初めてはだして田んぼに入ると、田んぼの中に小石や木の枝があり、足のうらが痛くて進むのが大変でした。また、中ごしの姿勢で植えていくのは時間がかかり、かなりの重労働

でした。昔の人は、こうして人の手で植えていたと思うと、米づくりの大変さを感じました。田植えが終わると、除草ざいをまいたり、追肥をしたりしていきます。その中でも特に大変なのが、毎日の水の管理や、田んぼ周辺の草かりです。毎日行う手間が、イネの生長につながっていきます。そして、たくさんの日光を浴び、生長したイネの穂が黄金色になったら、いよいよしゅうかくです。コンバインという機械を使って、一気にイネをかり、だっこくまで行きます。コンバインを使う前は、はせがけという方法で天日ぼしをしていました。五年生が学校で育てているもち米のしゅうかくでも、はせがけを行いました。とても大変でしたが、昔の人々の苦勞を味わうことができてよかったです。感じました。

このようにおじいちゃんから話を聞いたり、実際に米づくりを体験したりして、米づくりの苦勞を味わい、学びを深めることができました。おいしいご飯を毎日食べるのができるのは、おじいちゃんのおかげなので、本当に感謝したいです。そして、ぼくの家でお米をつくらなくなったらと考えると、米づくりを絶やさないように、未来につないでいきたいと考えるようになりました。今ぼくたちにできること、それは生産者が安心して米づくりができるよう、大切にお米を食べていくことです。ぼくはこれから、おじいちゃんのお米を守っていききたいです。



小学生最後の一年だから

鮫川小学校 六年 関根 優奈

私は、四月に誕生日が来て、十二歳になりました。そして、六年生になってから約六か月が経ちました。小学校生活もあと半年もないと考えると、とてもさびしい気持ちにもなります。「六年生らしくあいさつ」や「六年生らしく学校生活を送ること」など、全部に「六年生らしく」と言う言葉がきます。また、行事には、必ず「最後の」と言う言葉もついてしまいます。私のクラスでは、この一年間で最高の思い出を作ろうと、みんなで学級目標を考えました。その目標は「ありがとうを意識して最高の思い出を作ろう」です。縦に読むと「あいさつ」と読むことができます。私たちにとって一番大切なことは、あいさつだと思っただけです。クラスでこの目標を決めた時、私は心の中で二つの事を頑張ろうと決意しました。

まずは、六年生として委員会の仕事を頑張ろうと決めました。私が小学校で所属している委員会は、運営委員会です。運営委員会は、あいさつ運動を中心に明るく元気に活動しています。私はこの活動の中で、毎日のあいさつの大切さや、あいさつの気持ちの良さを全校生に伝えていきたいと思いました。また、授業で学習したSDGsの七番目の目標の「エネルギーをみんなにそしてクリーンに」を達成するために、校内の節電や節水を呼び掛けている。小学校生活最後の一年だから、一年後にやって良かったと思える

ように頑張りたいと思います。

次に、私が決めたことは、下級生とたくさん一緒に関わることで、なぜなら、五年生の時の私は、下級生と一緒に遊んだりしてませんでした。小学校の掃除の時間は、縦割り班と言い、一年生から六年生が各班に分かれて掃除をしています。同じ班の下級生とは関わりがあって、少しは話をすることがあったけれど、まだ話をすることがない一年生や二年生が沢山いることに気が付きました。だから、最後の一年間でたくさん一年生や二年生と関わりをもちたいと思いました。

新学期、かわいい一年生たちが鮫川小学校に入学してきました。私は全員の名前を憶えて仲良くなろうと思っていました。そして、一年前から知り合いだった女の子が新入生の中にいました。その子は、いつも笑顔で私の名前を呼んでくれて、私のいる所に走ってきてくれます。それがかわいくとても心が癒されます。

ある日、昼休みに外に出てその子に会いに行きました。会いに行ったら、その子とその友達がいって、また笑顔で走ってきてくれます。友達の子とは初めてお話をしたのだけど、

「一緒に遊ぼうよ。」

と、言われました。初めはびっくりしましたが、私は笑顔で、「いいよ。何して遊ぶ。」

と答えました。鬼ごっこに決定し、私が逃げて、女の子たちが鬼です。いっぱい捕まえられて、でもいっぱい逃げました。一年生と笑顔で遊び、とても楽しい昼休みになりました。休み時間が終わって教

室に戻ろうとしたときに、

「また遊ぼうね。」

と、女の子たちに言われました。笑顔で教室へ向かって走っていく一年生の後ろ姿を見て、私も六年前に上級生と校庭で遊んでもらった時の事を思い出しました。その時は、とても嬉しくて、もっともっと小学校が好きになりました。今は、一年生の嬉しそうな顔を見て、六年生としてちょっと誇らしい気持ちになります。その後、

「一緒に遊ぼう。」

と、鬼ごっこ的人数が一人二人と増えています。「一緒に遊ぼう。」は一年生と私のあいさつです。このように、五年生の時と比べていっぱい一年生と関わる事ができています。二期、三期ももっと一緒に遊びたいです。

小学校生活も、あと五か月。私は素敵な六年生として、最高の思い出をいっぱい作りたいと思っています。



見えないところで光る優しさ

鮫川中学校 一年 澤村 宗一郎

先日、卓球の大会が終わったあと、会場近くのファストフード店に立ち寄りしました。大会では思うようにいきませんでした。終わったあとの解放感から、笑顔で食事を楽しんでいました。私はポテトを食べながら、試合のなかで、自分のサーブがうまくできたことや、あと一歩粘りが足りなかったことなど、次の大会ではもっと強くなりたいと家族と話していました。

食事が終わり席を立つとき、私はあることに気づきました。それはゴミ箱の上や周りに散らばったゴミの多さでした。ハンバーガーの包み紙や飲み物のカップが、ゴミ箱に入れられずそのまま放置されていました。ゴミ箱の中はまだ空いていそうで、少し押し込めば入りそうなのに、捨てずに帰っていく人がいたようです。私は「どうしてこんなにゴミを残したまま帰れるのだろう。」と疑問に思いました。

そのとき、数人の高校生たちの集団が食べ終わったトレイを持ってやってきました。野球部のユニフォームを着ていて、部活帰りのようでした。彼らは自分たちのゴミを捨てるだけでなく、私が見ていたゴミ箱の上のゴミまで拾って、分別してちゃんと中に押し込んで入っていました。「誰かがやればいい。」という態度ではなく、自分から進んで片付けている姿に、私はとても驚きました。さらに、

落ちていたゴミまで拾って捨てていたので。

その様子を見て、部活帰りで疲れているはずなのに、他の人が出したゴミまで片付ける姿は、部活動で学んだ礼儀や責任感なのだと思います。私も卓球部に入っていますが、普段から「あいさつをきちんとすること」を顧問の先生に言われています。私は、小学生のときから気が付くと掃除をしたり、周りをきれいにすることに気がついていました。が、学校の外では、他人のゴミまでは進んで拾おうと思っただけではありませんでした。

高校生たちの行動を見て、私は「本当に強い人は、こういう小さなこともきちんとできる人なんだろうな。」と気付きました。ゴミを置いていく人と、そのゴミを片付ける人。同じ店にいたのに、行動によってこんなに印象が変わるのだと。私もこれからは「誰かがやるだろう」ではなく、「自分がやろう。」という気持ちをもちたいと思いました。

今回の出来事を通して、私はマナーの大切さを改めて実感しました。ゴミを捨てずに帰ってしまう人は、おそらく自分さえよければいいと思っていたのかもしれない。しかし、そういう行動は周りの人に不快な思いをさせます。一方で、あの高校生たちは、誰にほめられるわけでもないけれど良いことをしていました。これは誰かにほめられるためではなく、いつも心にある優しさや思いやりが行動になったのだと思います。

私は今回の経験を今後の生活に生かしていきたいです。たとえば、学校でも掃除の時間だけ頑張るのではなく、教室が汚れていたら

少しでも片付けたり、友達が出しっぱなしにしたものを一緒に片付けたりするなど、小さなことから行動したいと思います。



Aーイラストの活用

鮫川中学校 二年 関根 そら

近年、Aーの進化が社会や経済に大きな影響を与えています。日常生活だけでなく、仕事場や病院など、何気ない生活のなかにも、Aーは広く使われています。Aーを活用してできることの例として、画像認識や音声認識などがあります。そこで、私は人工知能(Aー)が生成したイラスト、Aーイラストと上手く付き合っていくにはどうしたらよいか考えました。

私は、Aーイラストを活用することは必要だと思います。そう考える理由は二つあります。

第一に、Aーイラストの活用を通して、時代についていくことが出来るからです。これからの時代はAーがもっと広がっていくと思いま

す。日本で、生成AIを使っている割合は九・一%であり、他国と比べて低いです。しかし、企業で「AIを利用する方針である」と答えた割合は四割以上で、これからAIを利用することが増えていくと考えられます。そこで、AIイラストを活用し、AIイラストのメリット・デメリットを自分で感じる事が大切だと思います。

第二に、AIイラストを利用して、自分自身の利益になるからです。AIイラストに関して、私はあまり良い印象をもっていなかったのですが、上手く活用することで自分自身の利益になる可能性があることを知りました。絵師にとってのAIイラストのメリットは、イラストを描き始める前に、構図や全体のイメージを把握するために使う、大まかなスケッチや下書きのラフと言われる作業の時短になります。AIに描かせることですぐに完成形が見られることがAIイラストのメリットです。AIイラストを参考にするので、ラフで悩むことが少なくなり、ラフにかける時間が減ると思います。AIイラストを描くうえで元となる図を何かしらの方法で透かしてそれをなぞることにより写し取る、トレースをしても良いかの判断はまだ議論中で、明確な判断はついていません。AIイラストの活用としてはあくまで参考にするというだけの方が、今のところ安全です。

また、AIイラストを活用することによって自分のイラストのクオリティが上がる可能性があります。AIに自分のイラストを読み込ませることで、簡単なラフでも完成形を出してくれます。その完成形を参考にしながら色々なことを真似すれば、いつもの自分

のイラストよりも、クオリティを上げられる可能性があります。AIにイラストを読み込ませることによって自分自身に無かったアイデアが出てくる可能性もあります。

一方、AIイラストを活用するうえで、AIイラストのデメリットや注意点も知っておく必要があります。AIイラストのデメリットとしては、言葉で表現しにくいものを表現できないことです。AIイラストには、まだ出力するのに得意な分野と苦手な分野があります。例として、「走る」「座る」などの単純な動きはAIが理解してイラストを出力してくれます。しかし、細かい動作や言葉では表現しにくいものは指示するのが難しいです。一見上手くできているように見えるAIイラストもありますが、実際は変異で出てきたイラストを人間が修正しているだけださうです。自分の思い通りのイラストをAIに指示することはとても難しく、かなりの時間とコストがかかります。微調整が難しいので、痒いところに手が届かないことがデメリットとして挙げられます。

また、AIイラストを活用するうえでの注意点としては、AIが生成した画像データに著作権があることによって、法的な問題が起きることがあります。そのため、生成された画像が著作権や商標権を侵害していないかを確認し、権利関係が不明確な場合は、使用を控えるなど慎重な対応が求められます。

最後に、以下のことから私はこれからの時代についていくためにはAIを活用することが必要だと思っています。

私たちの村を未来に残す

鮫川中学校 三年 高野 詩織

私たちが住む鮫川村は二〇二五年までに消滅してしまう可能性が七〇%を超え、消滅可能自治体とされました。これは県内で三番目に高い数値です。私はこのことを知り、鮫川村の移住者を増やし、私たちの故郷を未来に残したいと思いました。

そこで、私たちの住む鮫川村のような「地方」と呼ばれる地域には、どのような特徴があるのか考えました。まず、地方に住むメリットからです。実際に住んでみると、窓から見える風景は高いビルなどではなく、森や山、花や木などで、見ているだけでゆったりとした気分になれます。そして、山登りや川の探索、和紙作りなど自然が多いところならではの体験ができる場所が多くあります。このように、自然と触れ合いながらのんびり過ごせ、その土地の文化や伝統を感じながら生活できることがメリットだと思います。また、近所の人や地域との関わりも深いので、人と関わるのが好きな人ならメリットの一つだと思います。

次に、地方に住むデメリットです。鮫川村のみなさんは、遊びに行くときに鮫川村に駅がなく、浅川町や石川町まで車で行かないといけないことに不便を感じたことはないですか。また、お店や病院はとも少ないです。このような、交通の不便さや、商業施設、医療施設の少なさがデメリットだと思います。

では、生活に不便がある地方でどのようにすれば移住者が増えるのでしょうか。私は、移住者に来てもらうには、まず、その土地について知ってもらうことが大切だと思います。平成三十年に総務省が行った過疎地域の社会的価値に関するアンケート調査によると、居住地が非過疎地域の者が、今後、過疎地域とどのような関わりをもちたいかについて聞いた質問に、「保養と休養や観光などのために過疎地域を時々訪れたり、滞在したりする」と答えた人が最も多く、二番目は「アンテナショップや通販等で過疎地域の商品や特産物を購入する」という回答でした。

この結果から、私は、旅館や観光スポットを増やすのがいいのではないかと思いました。青森県の田舎館村では、稲作が盛んなことを生かし、田んぼをキャンバスとして、色の異なる稲を用いて巨大な絵を描く「田んぼアート」を目玉とする観光振興を図っています。その結果、全国から年間で三十万人以上の観光客の集客につながり、地域活性化に大きく貢献する取り組みになりました。鮫川村にもたくさん田んぼがあるためこの取り組みのように、この地域の自然や特徴を生かすことをすれば、鮫川村が自然豊かであることが伝わるうえに、たくさんの方が来てくれるのではないかと思います。また、岐阜県の高山市では地域資源を有効活用するために、地域の特徴的な伝統文化や自然などを体感できるツアーをはじめとした観光誘致を行なった結果、国内外からの観光客数が平成八年に比べて平成二十五年には約九・五倍になり、多くの観光客を呼び込むことに繋がりました。

鮫川村にもたくさんさんの自然があり、鹿角平観光牧場では都会では見ることのできない、満天の星を見ながらキャンプができるため、家族や若い人にも興味をもってもらえるのではないかと思います。鮫川村は、生活するうえで不便に感じることもありますが、自然の豊かさや人の温かさ、伝統など良いと思えることがたくさんある、素晴らしい村だと思います。そういったことを生かしながら地域活性化を図っていくことで、多くの方が鮫川村に興味を持ち、行ってみたいと思ってもらえる村になっていくのではないのでしょうか。



第二十九回 鮫川村詩のコンクール作品

詩のコンクール

小学校児童作品

最優秀賞

「生きる」

六年 小林 楓

生きていくということ
それはたくさんの人に出会うということ
友達ができるということ
美味しいご飯が食べられるということ
妹とケンカするということ
勉強ができてほめられるということ
大切な家族がいるということ
だからボクは毎日幸せに生きていく

優秀賞

「散歩」

五年 金澤 心晴

夕方に散歩をしよう
足音がなり前へと進む

川道と道路はキケン
気をつけて安全で楽しい散歩をしていこう

家族やじいばあばみんな散歩をしよう
散歩をしよう

そうすればみんなが笑顔になるからさ
夕方はすずしいから散歩にはちょうどいい
だから歩こう
みんなの笑顔が消えないように



「夏のいつもの日」

六年 円谷 真桜

風がふくとカーテンがゆれる

それがあたりまえというように

風がふくと風りんもゆれる

それがあたりまえというように

私はそれを聞きながらあたりまえのように本を読む

そんなあたりまえを大切にしようと思った

暑い暑い夏の日



佳 作

「せんぷうき」

一年 霜田 実梨

せんぷうきのまえで「あー!!」とこえをだしてみる

ふしぎなこえ

なんだかじぶんじゃないみたい

ぐわわんぐわわん

へんなこえ

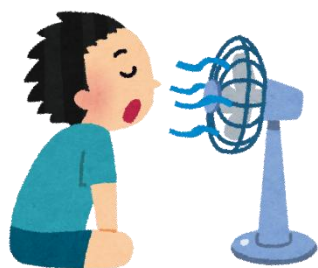
「うちゅうじんだー」といってみる

なんだかピタリそんなきぶん

ぐわわんぐわわん

うちゅうじん

なっただけできるへんしんごっこ



「せんこうはなび」

一年 赤坂 嶺

ひをつけるとまるくなる
まるでおこったかおみたい
ぱちぱちぱちぱち
ほうせきがたのしそうにおどっている
どんどんどんふくらんで
「ぼとん」もうちょっとやりたかったな
またなつにあそぼうね



「おそろしいみおちゃん」

二年 芳賀 羽心

しゅくだいをしていたら
となりに来てドリルを食べるみおちゃん
しゅくだいをしていたら
となりに来てえんぴつを食べるみおちゃん
しゅくだいをしていたら
となりに来てふでばこをよだれまみれにするみおちゃん
かわいい妹だけど要注意！



「入どう雲」

二年 芳賀 凜

空にもくもく白い雲
ふわふわうかんでわたあめみたい
でもおひさまかくしてしまったらかみなりゴロゴロ雨ザーザー
こわくてドキドキすこしワクワク
雨がやんだらまた青空
入どう雲ってふしぎだな



「太陽さん」

三年 赤坂 嘉信

あああちい
このあつき
うちゅうで太陽さんがはりきりすぎてんのかな？
ぼくは太陽さんに言いたいな
「太陽さん もう休んでお茶でもどうぞ」と。

「水の始まり」

ぴちよんといっぺき
ぴちよんぴちよんと集まって
ちよろちよろ小川

じゃぶじゃぶ岩をこえ
ゴーと川が大きくなった
のんびりながれて

ザザザンと海

キラキラ太ようてらされて

ぽかぽかのぼって空の上

もくもく雲になったらね
ザーと山にふってきた
ぴちよんといっぺき

またぼうけんはじまるよ

三年 澤村信次郎



「笑顔の花」

夏の夜空にさく大きな花
わたしは花火が大すき

みんな花火を見ると上を見上げて笑う
ほら
みんなの顔にも笑顔の花がさいたよ

「夏の音」

セミの声 花火の音 風りんの音
プールでひびくみんなの声
夏っていいね
色んな音が聞こえてくる
次はどんな音をさがそうかな

四年 森田 陽真璃



四年 須藤 望奈



「葉のへん化」

四年 西野 愛唯

春は花がキレイにさいて
夏は緑の葉がたくさんで
秋は葉がまっ赤っかっかで
冬は春に向けて冬みんち
そしてまた春がきてかわいいお花にへんしんだ



「夕立」

五年 大森 一葉

夏の夕方
せまり来る黒い雲
ゴロゴロと近づく音
いなづまを走らせるかみなり
はげしくふる雨
まるでみんながいないよう
不思議な時間
いつのまにかセミの鳴く声もどり
空がオレンジ色にかがやいていた



「ぼくのかいねこシマ」

五年 関根 真来

シマは訳あってうちのねこになった
ある日の夜ねこのぼくは他のねここと散歩にかけた
ガチャ

あれ、なんだか後ろ足がいたい
あれ 動けない

みんなまって ドキドキ

わながぼくの足をはさんでいた

いたい、助けて、

でもだれもいない 助けてくれない

だから必死で一人で帰った

いたく、くるしく、つらかった

でもがんばって帰った

お家が見えた、みんなも お兄ちゃんもいる

それからのはなにがあったか分からない

助けてくれたんだ、

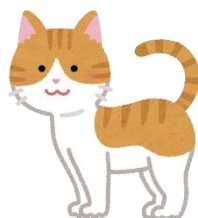
ぼくは今しあわせだよ、後ろ足が一本・・・

なくなっただけ

助けてくれてありがとう しあわせだよ

そう思ってくれてたら、

ぼくは君を助けたことほこりに思う



「夕立ち」

六年 関根 優奈

夏の暑い日
午後から突然降り出す
ザーザーと
雷や突風と共に
積乱雲が発達する
空を見上げ
黒い雲と冷たい風
夕立ちあとの涼しい空気
風情があっという
夕立ちのよさ



詩のコンクール

〈中学生生徒作品〉

最優秀賞

「空」

三年 木村 梨乃

見上げるといつもきれいな空が広がっている

夏の空は青い絵の具のように広がっている

見るたびに私の心は満ちてゆく

セミの鳴き声と共に広がる青空は

無限大の可能性を感じさせてくれる

夏の空は私の成長を見守ってくれている

優秀賞

「白でありたい」

一年 森田 優渚

白は何色にも染まり混ざり合う

わたしはコミュニケーションがへただ

うまくとけこめないところがある

それでもだれかが困っていたら

「大丈夫？」

と言ってあげたい

だれかが落ち込んでいたら力になってあげたい

何色にも混ぜられる

染まる白のように

寄り添い支えてあげられる人になりたい



「夕日がしずんだよ」

二年 蛭田希ノ風

夕日を見たよ

空がオレンジ色に輝いていたよ

赤色もあるね

ジワジワとジワジワと

色が混ざっていつてるね

山を見たよ

きれいな緑色だよ

「あっ大変」

緑色の中に赤色が入っていく

「あっ大変」

緑色の中にオレンジ色が入っていく

「あっ大変」

山の中に夕日が入っちゃった



佳 作

「前へ進む夏」

春の校門をくぐり

大きな制服に緊張して

ぼくは小さな一步を踏み出した

授業のスピードは早く

先輩の打球はまるで稲妻のよう

なにもかにもおどろいた

気づけばもう夏休み

部活の仲間と笑い合い

寺子屋では宿題に向う日

ぼくの中で何かが変わってゆく

この夏を越え

今よりもっと強くなる

勉強も卓球も

ぼくはきつと前に進める



一年 澤村宗一郎

「星達のささやき」

鹿角平の夜の風

感じて空を見上げれば

無数に広がる星達のささやく声に耳を向け
希望の道が見えてくる

一年 鈴木 颯太



「扇風機」

僕は扇風機

風をおくるのが仕事だ

夏の暑い日に

プロペラを頑張って回して

風を送っている

人はとても気持よさそうだ

なんだか憎たらしい

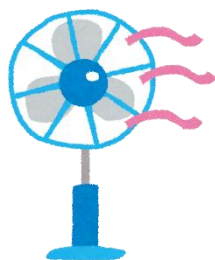
でももっと憎たらしいのがある

エアコンだ

最近あまり出番がないのも

彼がいるからだ

もっと出番をくれよー



二年 中川西 陽悠

「花たち」

三年 芳賀 幸歩

土から顔を出し、空へと向かう小さなつぼみ。
雨に打たれ、風に揺られて、
やがて開く、鮮やかな命。
一輪、また一輪と
次々にそれぞれの色や形で咲き誇る
光を浴びて香り高く
通り過ぎていく人々の心を安らぐ
しかし、
やがて訪れる、静かな別れ



「花火」

三年 黒田 采花

パツと咲いた空のなかの花たち
私たちは並んでそれを見上げてた
何を話したか覚えていないけれど
笑い声が夜空に混ざってた
消えてゆく火の粉みたいに
夏の思い出は儚くて
でもまっすぐに
気づいたら君と出会えてよかったってそう思ってた
遠くでまだ光ってる君との時間が胸に残ってる
忘れたくない今日を抱きしめていよう



「追いかけて」

三年 須藤菜々美

全中に行くよと決め 白い球を追いかけてきた
念願の東北大会
最初で最後の舞台に立つ
少しの緊張と

この舞台に立てることへの感謝を胸に
戦った一回戦

つかんだ一勝の喜び

緊張が増し足が震え

自分に負けた二回戦

全中への夢は途絶えた

けれど今までの努力は決して無駄じゃない

絶対にそう信じて

今日も白い球を追いかけて続ける



令和七年十二月 発行
発行者

鮫川村青少年健全育成推進協議会
事務局 鮫川村教育委員会教育課